

平成12年6月27日

熊本県病害虫防除所長

1 害虫名：トマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* BLANCHARD)

2 発生作物：トマト、メロン

3 発生確認の経過

平成12年4月14日に、平坦地域のトマト栽培ほ場からハモグリバエ類幼虫を採集し、羽化した成虫の形態を観察したところ、県内未確認のトマトハモグリバエと疑われる個体を認めた。そこで農林水産省横浜植物防疫所調査研究部に同定を依頼した結果、5月29日にトマトハモグリバエであることが確認された。

その後平坦地域のトマト及びメロン栽培ほ場におけるトマトハモグリバエの発生の有無を調査したところ、15地点中10地点で発生を確認した。地域としては平坦地域のほぼ全域に分布していた。また発生を確認した大部分の地点ではマメハモグリバエと混発していた。

4 形態

成虫：大きさは体長約1.3～2.3mmで、平成5年に県内で発生が確認されたマメハモグリバエや、在来種であるナスハモグリバエとほぼ等しい。体色もマメハモグリバエ、ナスハモグリバエとおおむね同じで、肉眼での区別は困難である。識別するには実体顕微鏡により頭部を観察する。トマトハモグリバエの頭部の外頭頂剛毛(vte)着生部の色彩は黒色で、マメハモグリバエ、ナスハモグリバエの同部の色彩は黄色である(図参照)。

卵：長径0.2～0.3mm、短径0.1～0.15mmの楕円形で半透明のゼリー状。

幼虫：淡黄色のウジ状で、3齢幼虫の体長は約3mm。

蛹：長さ1.3～2.3mm、黄褐色の俵状。

5 生態

雌成虫は産卵管で葉に穴を開け、葉肉内に卵を産み付ける。ふ化した幼虫は葉肉を食害し、葉に不規則な線状潜孔を形成する。老熟した幼虫は葉から脱出し、土中で蛹化する。潜孔及び蛹化の方法はマメハモグリバエとよく似ており、区別は困難である。

## 6 被害の特徴

マメハモグリバエ、ナスハモグリバエの被害とほぼ同じである。

## 7 寄主植物

マメハモグリバエと同様、極めて多くの植物に寄生する。海外ではメロン、キュウリ、カボチャ、トマト、ジャガイモ、トウガラシ、インゲンなどの作物が好適寄主として挙げられている。

## 8 防除対策

本種に対する登録農薬はなく、またマメハモグリバエと混発していることが多いと考えられるので、マメハモグリバエとの同時防除を行う。耕種的防除についてもマメハモグリバエに準じて実施する。

## 9 引用文献

岩崎暁生ら(2000)：日本におけるトマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* BLANCHARD) の新発生. 植物防疫 54 (4) : 12~17.